

「ベルゼブル論争」

2021年12月10日

「よく言っておく。人の子らが犯す罪やどんな冒瀆の言葉も、すべて赦される。しかし、聖霊を冒瀆する者は永遠に赦されず、永遠の罪に定められる。」イエスがこう言われたのは、「彼は汚れた霊に取りつかれている」と人々が言っていたからである。(マルコ福音書3章28節～30節)

主イエスと弟子たちの宣教団の周りには、苦しみ、悩む大勢の群衆が救いを求めて、集まって来た。政治的、経済的、宗教的、医療的に圧迫され、疎外されていた人々が大挙して、群がる状況が続いていた。宣教団は食事をする暇もないほど、多忙だった。

これを伝え聞いた主イエスの身内の者たちが、「気が変になっている」と思って、宣教活動を止めさせようと、取り押さえに来た。宗教家たちに命を狙われ、食事をする暇もないほどの活動を止めさせ、故郷に連れ戻し、安全に暮らせさせようと願ったからである。

多忙な宣教活動をしている所に、エルサレムから律法学者たちが下って来た。彼らは、主イエスの宣教に危機感を持った。悪霊に取りつかれ「罪人」と烙印された人々を、悪霊から解放し、社会に復帰させることは、彼らが営々と築き上げてきた律法に基づく宗教差別体制が覆されることであった。そして、主イエスが民衆から篤い尊敬、支持を得ることは、自分たちの宗教的権威が失墜することであった。何としても、主イエスの宣教を止めさせ、民衆からの尊敬と支持を押し込めたい。そこで、彼らは民衆に、「あの男はベルゼブルに取りつかれている。悪霊の頭で悪霊を追い出している」と言った。悪魔には階級があり、ベルゼブルは、その頭目である。主イエスの悪霊からの解放は、悪魔の頭であるベルゼブルの力によるものだ。主イエスが人々を救ってきた業は悪魔の業であると、徹底的に否定した訳である。

主イエスは、彼らと呼び寄せ、譬えで話された。「どうして、サタンがサタンを追い出せよう。国が内輪で争えば、その国は立ち行かない。また、家が内輪で争えば、その家は立ち行かない。もしサタンが内輪もめして争えば、立ち行かず、滅びてしまう。」どんな間柄でも、内輪もめをするところでは、内部分裂を起こし、自ら崩壊していく。また、「まず強い人を縛り上げなければ、誰も、その人の家に押し入って、家財道具を奪い取ることはできない。まず縛ってから、その家を略奪するものだ」と言われた。小悪魔の悪霊を追放するためには、大悪魔のベルゼブルを縛り上げてからでないとできない。主イエスの宣教は、悪魔の頭であるベルゼブルではないと明言された。そして最後に、「よく言っておく。人の子らが犯す罪やどんな冒瀆の言葉も、すべて赦される。しかし、聖霊を冒瀆する者は永遠に赦されず、永遠の罪に定められる」と、厳しく語られた。この言葉は釈義的には、下記のように解釈されよう。人間が犯す罪、神への冒瀆の言葉も、全て赦されるが、聖霊は、神と人とを結びつける神ご自身であるから、その聖霊を冒瀆する者は、神との関りが切られ、赦されることなく、永遠の罪に定められる。聖霊の拒否は、生ける神と結び合うことができない永遠の罪に陥るとの宣言ではないか。また、この言葉は、「彼は汚れた霊に取りつかれている」と言われたことへの怒りが込められていると思われる。ここでは、神の霊によって悪霊に苦しむ人々を解放し、ユダヤ人の代わりに復帰している福音を証しているのに、聖霊の働きに立ちほだかって、ベルゼブルによる仕業と言ひ募る宗教家たちを、主イエスが激しく叱責する臨場感を伝えている。